

現代ドイツ文学における 探検旅行の回帰と不在の他者

— 旧ドイツ領南洋に関する現代文学の場合 —

副 島 美由紀

いったい我々の冒険はどうなってしまったのだろうか、氷に覆われた峠道を越え、砂丘を超え、そしてあれほど頻繁にハイウェイに添って我々を導いてくれた冒険は？¹

クリストフ・ランスマイアー 『氷と闇の恐怖』より

1. 探検旅行記のポストモダンの回帰

1990年代頃から確認されるドイツ現代文学の傾向として、虚構的要素を含む歴史小説の流行を挙げることができる。英語圏の歴史小説に関するリンダ・ハッチオンの命名に従って「歴史記述的メタフィクション (historiografic metafiction)」²と呼ばれるポストモダンの歴史小説である。21世紀に入ってもそれは“ブーム”³と呼ばれるほどの人気を保っているが、中でも一つの独立したジャンルを形成しつつあり、しかも — ダニエル・ケールマンの『世界の測量』⁴が例示するように — 商業的に成功しているのが、かつて行われ

¹ Christoph Ransmayr: Die Schrecken des Eises und der Finsternis. Wien 1984, S.9.

² Linda Hutcheon: A Poetics of Postmodernism: History, Theory, Fiction. New York/London 1988, S.5.

³ Stephanie Catani: Metafunktionale Geschichte (n): Zum unverlässigen Erzählen historischer Stoffe in der Gegenwartsliteratur. In: Christof Hamann/Alexander Honold (Hg.): Ins Fremde schreiben: Gegenwartsliteratur auf den Spuren historischer und fantastischer Entdeckungsreisen. Göttingen 2009, S.143.

⁴ Daniel Kehlmann: Die Vermessung der Welt. Reinbek 2005.

た未知の土地の探検記 (Entdeckungsreisen)⁵の文学的な再生産である。既に80年代, シュテン・ナドルニーの『緩慢の発見』⁶ (1983) とクリストフ・ランスマイアーの『氷と闇の恐怖』 (1984) という二つの北極圏探検記が発表されて好評を博したが, 90年代になるとその先蹤を超えようとするかのようになり, 未だ見ぬ土地に惹かれて地の果てまでも旅に出たヨーロッパ人の紀行文の再話が次々と発表された。例えばラウル・シュロットの『フィニス・テラエ』⁷ (1995), ミヒヤエル・レースの『ルブアルハリ／空白の場所』⁸ (1996), アレックス・カピュの『ムンツィンガー・パシヤ』⁹ (1997), フェリツィタス・ホッペの『ピガフェッタ』¹⁰ (1999), ハンス・クリストフ・ブーフの『アフリカのカインとアベル』¹¹ (2001) 等々である。そして2004年に入るとこの傾向にはさらに拍車がかかる。¹² 以降, トーマス・シュタンゲルの『唯一の場所』¹³ (2004), フェリツィタス・ホッペの『犯罪者と無能者』¹⁴ (2004), 先述の『世界の測量』 (2005), アレックス・カピュの『星影の旅人』¹⁵ (2005), イリヤ・トロヤーンフの『世界収集家』¹⁶ (2006), クリストフ・ハーマンの『ウサンバラ』¹⁷ (2007), アレックス・カピュの『時間の問題』¹⁸ (2007), ハンス・

⁵ „Entdeckung“は本来「発見」を意味するが, 歴史学においてかつて「地理上の発見」と呼ばれた概念が「大航海」という用語で置き換えられたのと同じ意図に於いて, 本稿でも「探検」という訳語を宛てている。

⁶ Sten Nadolny: Die Entdeckung der Langsamkeit. München 1983.

⁷ Raoul Schrott: Finis Terrae. Innsbruck 1995.

⁸ Michael Roes: Rub' al-Kahli - Leeres Viertel. Frankfurt a. M. 1996.

⁹ Alex Capus: Munzinger Pascha. Zürich 1997.

¹⁰ Felicitas Hoppe: Pigafetta. Reinbek 1999.

¹¹ Hans Christoph Buch: Kain und Abel in Afrika. Berlin 2001.

¹² Hansjörg Bay: Literarische Landnahme ? Um-Schreibung, Partizipation und Wiederholung in aktuellen Relektüren historischer ‚Entdeckungsreisen‘. In: Ders./Wolfgang Struck (Hg.): Literarische Entdeckungsreisen: Vorfahren-Nachfahrten-Revisionen. Köln 2012.

¹³ Thomas Stangl: Der einzige Ort. Graz 2004.

¹⁴ Felicitas Hoppe: Die Verbrecher und die Versager. Hamburg 2004.

¹⁵ Alex Capus: Reisen im Licht der Sterne. München 2005.

¹⁶ Ilija Trojanow: Der Weltensammler. München 2006.

¹⁷ Christof Hamann: Usambara. Göttingen 2007.

¹⁸ Alex Capus: Eine Frage der Zeit. München 2007.

クリストフ・ブーフの『ザンジバル・ブルース』¹⁹ (2008) 等々、ポストモダン探検旅行記が競うようにして誕生している。

しかし世界の各地が隅々まで交通網で結ばれ、地理上の新たな冒険など存在しないように見える現在、なぜドイツの文学およびメディア領域において²⁰かつての探検旅行記が盛んに再生産、あるいは再演出されているのだろうか。A・ホーノルトは、旅にまつわる期待を満たしてくれるのは旅の体験そのものではなく、旅について記録され人に読まれる物だとし、容易に時間と空間を超えられる現代だからこそ、本来困難を伴う物理的な越境方法が現代の読者の好奇心を満たすのだ、と述べている。²¹ 同様にH・バイとW・シュトゥルックも、マス・ツーリズムやインターネットの拡大によって得られる世界との近接性よりももっと抵抗力のある真生な現実に対する読者の願望が、探検文学の回帰という現象の背景にあると述べている。²² さらに地球の至る所に旅行情報の蓄積がある現代だからこそ、他者との遭遇が興奮を伴う体験であった時代の記録が考古学的楽しみをもたらす、ということも言えるであろう。

しかし、ポストモダンの探検記には独自のジレンマがある。²³ 地図上の空白地帯を求める行為が植民地主義的行為である以上、植民地時代の探検記を再生産しながらいかにして植民地主義的であることから逃れるかという問題である。例えば『氷と闇の恐怖』においては、探検自体に対する多様なパースペクティブの設定や後日談の挿入による英雄的行為の相対化によって、また『緩慢の発見』においては西洋中心主義的ではない主人公の性格造形によつ

¹⁹ Hans Christoph Buch: *Sansibar Blues*. Frankfurt a.M. 2008.

²⁰ テレビ番組や映画製作における探検記の再生産については以下を参照。Hansjörg Bay/Wolfgang Struck: *POSTKOLONIALES BEGEHREN*. In: Gabriele Dürbeck/Axel Dunker (Hg.): *Postkoloniale Germanistik*. Bielefeld 2014, S.457-578.

²¹ Alexander Honold: *Das weiße Land: Arktische Leere im postmodernen Abenteuerroman*. In: *Ins Fremde schreiben*, S.70ff. (注3)

²² Bay/Struck: *POSTKOLONIALES BEGEHREN*, S.462. (注18)

²³ Hansjörg Bay: *Going native?* In: *Ins Fremde schreiben*. S.134. (注3)

て、コロニアルな状況から逸脱する次元が創出されている。そしてH・バイが言うように、文学テキストのこのような刷新的な潜在能力と美的な潜在能力とは分かちがたく結びついているのだ。²⁴ また、探検旅行記のポストモダンの回帰という動きは、ドイツによる植民地支配の省察・回顧の動きと軌を一にしている。²⁵ ドイツ領植民地における探検・冒険旅行は北極圏探検とは異なり、植民化された原住民との遭遇、つまりM・L・プラットの言う「コンタクト・ゾーン」²⁶が体験の構成要素と成るはずである。では旧ドイツ領アフリカを舞台とする『アフリカのカインとアベル』、『ウサンバラ』、『時間の問題』等の小説においては、ポストモダン歴史小説であると同時にポストコロニアル的転回をも可能にするような文学的刷新が見られるのだろうか。

旧ドイツ領南洋に関する記憶の喚起は、旧ドイツ領アフリカの歴史的回顧や学術研究よりやや遅れて始まったが、ドイツ領南洋に関する現代文学作品もやはり比較的最近発表されたものが多い。中でもドイツ支配時代の反植民地闘争に関わるポストコロニアル文学に関して筆者は一つの論功をまとめてはいるが、²⁷ 探検・冒険物語の再生産という現象はまた別種の問題性を持つ。よって本稿では、そのような回帰した探検メタフィクションとしての現代南洋文学作品であるアレックス・カピュの『星影の旅人』(2005)、マルク・ブールの『アウグスト・エンゲルハルトの楽園』²⁸ (2011)、クリスティアン・クラハトの『帝国』²⁹ (2012)、及びハンス・クリストフ・ブーフの『ノルデと私』³⁰ (2013) という4作品を取り上げ、特に上記の「コンタクト・ゾーン」及び

²⁴ Bay: Literarische Landaufnahme? In: Literarische Entdeckungsreisen. S.108. (注12)

²⁵ Ibid.

²⁶ Mary Louise Pratt: Imperial Eyes. Travel Writing and Transculturation. New York 1992, S.6f.

²⁷ 副島美由紀「新しい“オセアニズム”と旧ドイツ領南洋：旧ドイツ領ニューギニアに関する現代ドイツ文学を読む」In：「小樽商科大学人文研究」130輯 2015, 87-107頁.

²⁸ Marc Buhl: Das Paradies des August Engelhardt. Frankfurt a.M. 2011.

²⁹ Christian Kracht: Imperium. Köln 2012.

³⁰ Hans Christoph Buch: Nolde und ich. Ein Süsdeetraum. Berlin 2013.

被植民者としての〈他者〉との関係性について検討するものである。またポストコロニアル時代の疑似コロニアル文学という現象自体についても、改めて考察を試みたい。

2. スティーヴンソンと「宝島」の探求

本論で取り上げる4作品の内容はいずれも探検的・冒険的要素を持つものであるが、共通して得られる印象は〈他者〉という存在の希薄さである。その希薄さの表れはそれぞれに異なっているので、以下に作品を概説しつつそれぞれの特徴を捉えてみたい。

A・カピュの作品で西サモアを舞台とする『星影の旅人』³¹の主人公は、小説『ジキル博士とハイド氏』や『宝島』で知られるイギリスの作家ロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson 1850-1894) である。スティーヴンソンは1889年から亡くなるまでの5年間、西サモアに住んで作家活動を行っている。西サモアがドイツの植民地となるのは1899年であるが、以前からこの地域ではハンブルクのゴーデフロイ父子商会がコプラ貿易を展開しており、その当主は「南洋王」と呼ばれる程の影響力を持っていた。³² スティーヴンソンが西サモアに到着した頃、ゴーデフロイ社の後身である「ドイツ商工プランテーション協会 (die Deutsche Handels- und Plantagen-Gesellschaft)」が西サモアの農地の約半分を管理するほどの支配力を持っており、彼の書簡³³やエッセイ³⁴も「ドイツの商会」や「ドイツの官吏」の強い存在感を伝えている。またこの著名な小説家の存在も、サモアというトポス

³¹ Capus: *Reisen im Licht der Sterne*. (注15, 引用は本文中に数字で表記する。)

³² Bernd G. Längin: *Die deutschen Kolonien: Schauplätze und Schicksale 1884-1918*. Hamburg 2005, S.24.

³³ Robert Louis Stevenson: *Vailima letters: being correspondence addressed by Robert Louis Stevenson to Sidney Colvin, November 1890-October 1894*. London 1895.

³⁴ *A footnote to history: eight years of trouble in Samoa*. 1892 New York.

が後世の集団的記憶の中に確保されることに寄与することとなった。³⁵ 例えば既に1932年に中島敦が、サモアに暮らすスティーヴンソンを主人公として『光と風と夢』という日記形式の小説を發表している。最近ではザビーネ・ブリュッシングの『ジャングルの灯台』³⁶ (1998) や、『読書の歴史』で知られるアルベルト・マンガエルの『椰子の木陰のスティーヴンソン』³⁷ (2003)、またF・クレンケの『サモア,あるいは齡50の男』³⁸ (2006)といった小説が、サモアにおけるスティーヴンソンを題材にしている。ブリュッシングとマンガエルの二作品が“ジキルとハイド”のような二重人格性を筋書きに織り込んだ作品だとすると、カピユの『星影の旅人』は『宝島』の続編とも言うべき作品であり、スティーヴンソンと「宝探し」に纏わるある歴史的仮説を披露する目的で書かれている。つまり、スティーヴンソンがサモアに移住したのは従来言われているように健康増進のためではなく、実は彼自身が有名な「リマの財宝」の在処を探索するためであった、という説である。作品巻末の謝辞によると、この説はニュージーランドのヴァルター・フルニ (Walter Hurni) の研究に基づくものであるが (222)、カピユは自らもスティーヴンソン研究を行ってサモアに赴き、小説の中に自ら語り手として登場してスティーヴンソン自身の「宝探し」の物語を語る。

この語り手によると、スティーヴンソンは『宝島』には何らモデルとなるものがないと主張し続けているものの、それは事実ではない (103)。彼はサンフランシスコに住んでいた時、ある船乗りから「リマの財宝」が眠る「ココス島」の話聞き、しかもその財宝の在処を示す地図を譲与される (65ff)。この話を元に小説『宝島』を書いた彼は、さらに後年その地図に拠ってココ

³⁵ Thomas Schwarz: Ozeanische Affekte: Die literarische Modellierung Samoas im kolonialen Diskurs. Berlin 2013, S.251.

³⁶ Sabine Brüsing: Leuchtturm im Dschungel. Berlin 1998.

³⁷ Alberto Manguel: Stevenson bajo las palmeras/Stevenson under the Palm Trees. Madrid 2003. (Deutsche Übersetzung: Stevenson unter Palmen: Aus dem Engl. von Chris Hirte. Frankfurt a.M. 2003.)

³⁸ Friedrich Kröhnke: Samoa, oder der Mann mit 50 Jahren. Aachen 2006.

ス島の至近距離にある西サモアに居を定め、探索の結果「リマの財宝」を手に入れる。スティーヴンソンの著述にはココス島や財宝に関する言及は何もないのだが、サモアの近隣の島がかつて「ココス島」と呼ばれていたことや（153）、スティーヴンソンの家族が彼の死後も奇妙なほど贅沢な暮らしをしていた（201）事実等々が自説の証左となり得る、と語り手は説いている。しかし小説はこの仮説の展開に留まらず、語り手自身の「宝探し」の思い出や、「リマの財宝」を求めて探検に赴く冒険家達の様々なエピソードを紹介しており、「宝探し」という行為自体が作品の隠れたテーマとなっている。

しかしこの作品の文学的な価値評価は容易ではない。歴史的事実の不透明さを暗示するポストモダンの要素はあるが、数ある“スティーヴンソネイド”の一冊である点においても、「宝探し」という19世紀的な主題を扱っている点においても、S・ツバリクが言うようにこの小説のテーマ自体に目新しさはない。³⁹つまり、カピュは『星影の旅人』においてサモアという「南洋」を伝統的な「宝探し」という探検の場として描いており、この場合の「南洋」は18世紀末からのヨーロッパ人の文化的記憶に浸透したイメージである。スティーヴンソンの生活及び人間関係の描写に関しても、コロニアルなディスコースから逸脱するような側面は見られない。またA・ハルが批判するように、サモアの原住民達はほとんど作品に登場せず、登場するとしても周辺的な役割を集团的に演じるのみで、その描写には19世紀当時のステレオタイプの表現が使用されている。⁴⁰例えばサモア人嫌いで使用人を「食人族の黒んぼ少年」（36）と呼び、「彼らを避けるために段取りをつけつつ生活する」（36）というスティーヴンソン夫人の書簡が引用されている。このような演出は、H・バイが言うようにヨーロッパの視点をそのまま再現することによりかつての植民地主義的心情を露呈させる⁴¹効果を持っているが、作品中にコロニ

³⁹ Sabine Zubarik: Vom Verstecken und Wiederausgraben., In: Literarische Entdeckungsreisen, S.353. (注12)

⁴⁰ Anja Hall: Paradies auf Erden? Mythenbildung als Form von Fremdwahrnehmung. Würzburg 2008, S.221.

⁴¹ Hansjörg Bay: Going native? Mimikry und Maskerade in kolonialen

アルな心情を十分に相対化するだけのポストコロニアルな転回点があるかどうかは、大いに疑問が残る点である。⁴²

3. 南洋の冒険：生活改革者の楽園

ステイーヴンソンと並んで、ドイツ領ニューギニア地域の小島に住んだアウグスト・エンゲルハルト (August Engelhardt 1875-1919) も、南洋植民地史に関わる記憶文化の形成に関与する人物の一人である。⁴³ エンゲルハルトはニュルンベルクで薬局の見習いをしていた人物で、19世紀末に流行していた生活改革運動、特に菜食主義運動、裸体運動、日光浴運動の信奉者だった。1903年にその信条を実践するため、ニューブリテン島近くのカバコンという小島を買い取って移住する。裸体で日光浴をしつつココナツのみを摂取すれば不死性が得られると説いた彼の教義は信奉者を生み、ドイツ本国から数名の若者達が訪れてカバコンに定住する。しかしコロニーは死者を出して瓦解し、エンゲルハルト自身も1919年に病死する。「ドイツ最初のヒッピー」⁴⁴とも呼ばれるエンゲルハルトはニューギニア地域では有名だったらしく、1914年にこの地域を訪れた画家のエミール・ノルデもカバコン島に彼を訪問している。⁴⁵ 彼の存在はその後長く忘却されてはいたが、2010年にZDFのドキュメンタリー番組「南洋の冒険」⁴⁶によって取り上げられた頃から人々の

Entdeckungsreisen der Gegenwartsliteratur (Stangl; Trojanow). In: *Ins Fremde schreiben*. S.134. (注3)

⁴² Vgl. Schwarz: *Ozeanische Affekte*, S.258. (注31)

⁴³ Dieter Klein: *Neuguinea als deutsche Utopia: August Engelhardt und sein Sonnenorden*. In: Hermann Hiery: *Die deutsche Südsee 1884-1914 - Ein Handbuch*. Paderborn 2002, S.450-458.

⁴⁴ Christina Horsten: *Dieser Nürnberger war der erste Hippie der Welt*. In: *Abendzeitung*. 18.01.2010.

⁴⁵ Emil Nolde: *Welt und Heimat. Die Südseereise 1913-1918*. Köln 1965, S.91f.

⁴⁶ ZDF: „Abenteuer Südsee“. 2010年4月放送の3回シリーズ „Das Weltreich der Deutschen“の一部.

関心を集め、1905年当時の教団のパンフレットが再版されたり、⁴⁷ エンゲルハルトの名によるフェイスブックのページが自動的に生成されたりした。⁴⁸ また彼を主人公にした小説がマルク・プールとクリスティアン・クラハトによって立て続けに発表され、この悲喜劇的な人物像がいかにドイツ人の関心を惹きつけるかを示した。特にクラハトの『帝国』は最もよく読まれている旧ドイツ領南洋関係書の一つである。エンゲルハルトのカバコン島への旅は探検旅行ではないが、故郷のニュルンベルクを去ってニューギニア地域という全く未知の土地で自分のコミュニティを作ろうとしたという点において、ZDFの命名の如く一つの冒険と捉えることが出来る。よって本論ではマルク・プールの『アウグスト・エンゲルハルトの楽園』⁴⁹とクリスティアン・クラハトの『帝国』⁵⁰を南洋に関わる冒険文学として位置づけ、「コンタクト・ゾーン」の扱いという観点からこの二作品を論じてみたい。

『アウグスト・エンゲルハルトの楽園』（以下『楽園』と省略）における主人公は無知ゆえに高みを目指して失墜するタイプの夢想家であり、作品は反教養小説として読むことが出来る。彼の生活改革コロニーは次第に民族主義的傾向を強め、内紛と分裂へと向かうが、平和主義的な菜食主義者達がファシストの原型へと変貌していく過程が、『楽園』の筋書きの山場となっている。作品には〈他者〉の代表として原住民の族長が登場し、明確に「コンタクト・ゾーン」が描かれている。トーライ族の族長であるカブアは当初ドイツの植民地支配を批判するが、次第にエンゲルハルトの存在を許容し、後者も前者を「高貴な男」(102)と敬い、二人は互いを認め合うよき隣人になっていく。エンゲルハルトはトーライ族とのファースト・コンタクトの際、自分の想像

⁴⁷ August Engelhardt/August Bethmann (Hg. von Dieter Kiepenkracher): Hoch der Äquator! Nieder mit den Polen: Eine sorgenfreie Zukunft im Imperium der Kokosnuss. Norderstedt 2008.

⁴⁸ <<https://www.facebook.com/august.engelhardt.77>> [Abruf: 01.12.2015.]

⁴⁹ Buhl: Das Paradies des August Engelhardt. (注28, 引用は本文中に数字で表記する。)

⁵⁰ Kracht: Imperium. (注29)

方の源について「ロビンソン・クルーソーとヴィネトゥ⁵¹と『モヒカン族の最後』⁵²とルソーの混交物」(30)と自嘲的に認めているが、他のトーライと遭遇する際もカール・マイにおける登場人物を想起せずにはいられない(142)。語り手の記述もエンゲルハルト自身の想像力から距離を置いているとは言い難く、敵対者としてのカプア像から徐々に善意の援助者としての側面が表れ、最終的には“カバコンのヴィネトゥ”とも言うべき族長イメージが成立する。このカプア像はヨーロッパ的想像力の期待値から創造されたものであり、スピヴァクの言う選択的に定義された他者⁵³である。ヨーロッパ的主体の意識を離れたサバルタンの主体、あるいは「まったき他者」⁵⁴はここには存在しないのである。

このような現象はクラハトの『帝国』の場合、さらに明確である。物語はドイツ領ニューギニアを舞台にはしているが、その本質は作品のタイトルが示す通り、エンゲルハルトのような生活改革者達を生んだドイツ帝国が第三帝国に変貌し、最後にはアメリカの新しい資本主義帝国に屈して行く推移を皮肉と諧謔を以て描いた、西洋についての物語である。そこではココナツ菜食主義という極端な改革思想を持つ人物が滑稽かつグロテスクに描写されており、彼が旅の途上でカフカやヒトラーやトーマス・マンといった他のドイツ帝国の役者たちと遭遇する様子が、スラップスティックのように語り繋がれていく。それは複数の登場人物を軸にして様々な物語の部分が強引に連繋付けられて語られるピンチョンの『重力の虹』のpasteur-shuのようであり、物語自体が映画作品として語りの枠の中に投入されるポストモダンの仕掛けも模倣されている。⁵⁵ G・デュルベックが作品における民俗誌的言説の

⁵¹ カール・マイの著作に登場するこのアパッチの族長は、マイの作品における「高貴な未開人」の象徴とも言える。

⁵² James Fenimore Cooper: The Last of the Mohicans. Philadelphia 1826.

⁵³ G.C.スピヴァク：『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳(みすず書房) 1999, 65頁。

⁵⁴ 同上, 70頁。

⁵⁵ 『重力の虹』の模倣はクラハトの前作である*Ich werde hier sein im Sonnenschein und im Schatten*においても行われており、クラハト自身が自分のFacebookで

不在を指摘しているように、⁵⁶ 具体的存在としての植民地は後景に退き、被植民者達との摩擦や葛藤もない。エンゲルハルトにとって最も身近な〈他者〉であるはずのトーライ族の「ボーイ」は「主人」であるエンゲルハルトの風刺画的存在で、時折姿を見せるトーライ族達も舞台の書き割りのように描かれ、とりわけ族長はコミカルでユーモラスな装飾的役割を担っている。作品における〈他者〉はほぼ完全に戯画化されていると言えよう。『帝国』の特徴である語り手のイロニーや嘲笑的態度が植民地主義者を風刺しているとは言え、その風刺は植民地の歴史を批判的に回想すると言うよりは批判を諧謔の中に解消させて無害化するものである。⁵⁷ よって『帝国』における諧謔は、「帝国主義のパターナリズムを笑いのめしているくせに、みずから同じ傲慢なパターナリズムを体現してしまう」⁵⁸という、コンラッドの『ノストローモ』に関するサイドの指摘を思い起こさせる。結局『帝国』はドイツ人の自己意識を巡るコロニアル小説のパロディー⁵⁹であり、著者であるクラハト自身の傲慢さについて時折不快感が表明されるのも、⁶⁰ そこにコンラッドの場合と同質の問題が潜んでいる故だと推測することも可能であろう。いずれにせよ、この作品中にポストコロニアルな転回点を見出すことは困難である。

認めている。参照：副島美由紀：「Christian KrachtのIch werde hier sein im Sonnenschein und im Schattenにおけるポストコロニアルなポストヒューマン」In：「小樽商科大学人文研究」129輯2015、65-90頁。

⁵⁶ Gabriele Dürbeck: Ozeanismus im postkolonialen Roman: Christian Krachts Imperium. In: Saeculum: Jahrbuch für Universalgeschichte. 64(1) 2014, S.119f.

⁵⁷ Roman Bucheli: Tant de brui. In: Neue Zürcher Zeitung. 06.03.2012; Erhardt Schütz: Kunst, kein Nazikram. In: der Freitag, 16.02.2012.

⁵⁸ エドワード・W・サイド『文化と帝国主義1』大橋洋一訳（みすず書房）1998、13頁。

⁵⁹ Adam Soboczynski: Seine reifste Frucht. In: Die Zeit, 14.02.2012.

⁶⁰ Georg Diez: Die Methode Kracht. In: Der Spiegel 66. (2012) H.7. 13.02.2012; Volker Weidermann: Notiz zu Kracht. Was er will. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung. 03.05.2012; Buch: Nolde und ich. S.87. (注30)

4. ドイツ人画家と南洋ファンタジー

『ノルデと私』⁶¹においてハンス・クリストフ・ブーフが再現しているのは、画家のエミール・ノルデが1913年から14年にかけて行ったニューギニアへの調査旅行である。ノルデはドイツ政府の医学調査隊に画家として同行し、その時の記録を後年手記として出版しているが、⁶² ブーフはこの手記に多少脚色を加え、2012年に自分自身が行ったパプア・ニューギニア旅行の記録を挿入して二つの旅行記を対比的に構成している。一つのトポスを時代の異なった多層のナラティヴによって語るのはブーフがよく用いる手法であり、著者自身の解説によると一元的な物語の伝達を回避する方法である。⁶³ 例えば『アフリカのカインとアベル』においては、ドイツ領東アフリカの地形調査を行ったドイツ人アフリカ学者⁶⁴のナラティヴと、その百年後に「ルワンダ虐殺」取材したジャーナリストの手記が、そして『ザンジバル・ブルース』では、19世紀に活躍したザンジバルの奴隷商人⁶⁵の回想とアフリカを旅行する現代のドイツ人作家の語りとが交互に登場する。

ノルデにとってこのニューギニア旅行は“原初的な芸術”及び“原初的な人間”を求めての旅であり、彼は自分の旅行を一種の探検旅行と捉えていた。⁶⁶ 実際にニューギニア地域の住民に出会って彼らに魅了されるが、元より反植民地主義的であった彼はヨーロッパ人の感化によって住民の“原初性”

⁶¹ Hans Christoph Buch: *Nolde und ich. Ein Süsdeetraum*. Berlin 2013. (引用は本文中に数字で表記する。)

⁶² Emil Nolde: *Welt und Heimat*, geschrieben 1936, 3.Auflage, Köln 1990.

⁶³ Hans Christoph Buch im Gespräch mit Oliver Lubrich: »Wie ich Livingstone fand.« *Reise ins äußerste Afrika*. In: Honold / Hamann. *Ins Fremde schreiben*. S.171ff. (注3)

⁶⁴ Vgl. Richard Kandt: *Caput Nili: Eine empfindsame Reise zu den Quellen des Nils* (Band 1,2). Berlin 1914. (Nachdruck 2010)

⁶⁵ Vgl. Heinrich Brode: *Tippu Tip. Lebensbild eines zentralafrikanischen Despoten*. Berlin 1905.

⁶⁶ Dieter Klein: Engelhardt und Nolde. In: Helmuth Steenken (Hg.): *Die frühe Südsee. Lebensläufe aus dem 'Paradies der Wilden'*. Oldenburg 2001, S.125.

が失われつつあることに憤怒を覚える。手記の中でも原住民の「絶滅」を招くヨーロッパ人の強欲は厳しく批判されているが、⁶⁷ ブーフによる手記の再演出もこの批判を伝えており、特に、白人への隷従を嫌うあまり子孫を残すことを断念する部族がいる事を知った時のノルデの義憤は(68)、この手記の山場となっている。

一方現代の旅人であるブーフは探検家ではなく、川下りツアーやシュノーケリングを楽しむ普通の観光客である。彼はノルデと違って“原初性”への期待など持ち合わせてはいない。彼が目にする原住民達は、汚職で肥え太った官吏(33)、一見普通のように見えるが売春婦かも知れない女性達(32)、物乞いをする子供達(40)であり、耳にするのはビジン英語である。地元人間が確固たる個人として登場することもなく、ブーフが言葉を交わすのは主に白人の言語学者や地元に住むドイツ人といった人物達である。つまりブーフの旅行記においては、21世紀の容易なツーリズムとまるで「参与なき観察者」のようなツーリストが、ノルデの感情的な訴えと対比的に描かれているのである。

さらに作品には第三のナラティヴとして、ドイツ領ニューギニアのプランテーション業者として名高いエマ・フォーサイス・コーの虚構の自伝が挿入されている。作品中のノルデの手記にも登場するこの女性はその美貌と財力によって「クィーン・エマ」と呼ばれ、ドイツ人入植者達をもてなす社交界の中心として多くの記録文書に登場する人物である。アメリカ人を父として西サモアの王家に生まれたエマは、サモア時代に先述の「ドイツ商工プランテーション協会」を相手に交易を行っていたが、半奴隷貿易によって進出したニューギニア地方でコブラのプランテーション業を興す。その後ドイツ人と結婚してニューブリテン島近辺の村落を傘下に入れ、この地域の大地主のような存在となっていた。⁶⁸ ドイツ領ニューギニアを舞台とする冒険小説『楽

⁶⁷ Nolde: Welt und Heimat, S.99.

⁶⁸ Helmuth Steenken (Hg.): Queen Emma, Ein SüdseeTraum. In: Ders.: Die frühe Südsee. S.92-110. (注67); Andreas Blauert: Queen Emma of the South Seas. Die

園最後の舞踏』⁶⁹やクラハトの『帝国』においてもエマはドイツ人男性のロマンスの相手として登場するが、『ノルデと私』における虚構性と娯楽性の強い自伝が描き出すのは、強欲でピカレスクなクイーン・エマ像である。西洋人としてのアイデンティティから語られるかのようなこの女傑像は、西洋の読者が喜ぶ⁷⁰想像図の一つであり、作品は彼女にまつわる噂の数々が現実を覆い隠す様を意図的に露呈させている。結局『ノルデと私』の演出が伝えるのは、“原初的な人間”という思い入れであれ、クイーン・エマのロマンスであれ、その猛女像であれ、西洋人の抱くイメージが如何に「南洋ファンタジー」と呼ばれる伝統的かつ集団的な想像力に既定されているかということである。このような「南洋ファンタジー」は、「南洋の夢」というこの作品の副題も暗示しているように西洋の自己イメージの投影であり、⁷¹ 現地の実情とはあまり関わりのないものである。そのイメージを遊技的に扱うブーフの技法は作品全体にメタ・メタフィクションと呼べるような性格を与えており、また南洋の真実に近づくことへの読者の期待を裏切る意味で、ポストコロニアル文学としての資質を含んでいると言えよう。

以上のように、旧ドイツ領南洋に関わる探検文学の再演出における〈他者〉は、依然として不可視化、周辺化、戯画化されている。このような〈他者〉

Karriere der Emma Forsayth (1850–1913) in Deutsch-Neu Guinea. In: Bernhard Klein/Gesa Mackenthun (Hg.): Das Meer als kulturelle Kontaktzone. Konstanz 2003, S.245–268; Philippa Söldenwagner: Geschäft und Liebe auf dem Bismarck-Archipel. Die Geschichte der Plantagenunternehmerin Queen Emma (1850–1913). In: Johannes Paulmann (Hg.): Ritual-Macht-Natur: europäisch-ozeanische Beziehungswelten in der Neuzeit. Bremen 2005, S.113–130.

⁶⁹ Jürgen Petschull: Der letzte Tanz im Paradies. Hamburg 2009.

⁷⁰ Vgl. Thomas Schwarz: Uhrmensch unter Urmenschen: „Nolde und ich“ ist ein Südsee-Traum von Hans Christoph Buch. In: Literaturkritik.de. August 2014. <http://www.literaturkritik.de/public/rezension.php?rez_id=19477> [Abruf: 01.12.2015.]

⁷¹ Vgl. Bernd Thum/Elisabeth Lawn-Thum: ‚Kultur-Programme‘ und ‚Kulturthemen‘ im Umgang mit Fremdkulturen: Die Südsee in der deutschen Literatur. In: Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache. Bd. 8. 1982, S.1–38. (hier S.30f.)

の不在、あるいは〈他者〉の「おかまいなしの認知」⁷²が行われている領域においては、デリダの用語を借りてスピヴァックが提唱するような「まったく他者への呼びかけ」⁷³へ至る道は未だ遙かに遠いと言わざるを得ないだろう。

5. 疑似コロニアルの願望と不在の他者

1990年代以降ドイツの文学とメディアの領域で起きている植民地時代の探検文学の回帰が、植民地史の批判的省察と平行して起きているという現象を、H・バイとW・シュトゥルックは説明困難な現象だとしながらも以下のように解説している。⁷⁴ 植民地に関する記憶がようやく社会的に正当な話題としての地位を獲得した現在、植民地支配は批判的検証の対象であると同時に懐古の対象ともなっている。現在この植民地史という記憶の領域には、ネオコロニアル、コロニアル以降、疑似コロニアル (neo-, nach-, quasi-kolonial) という様々な名称で呼び得る願望の様相が混在している。バイとシュトゥルックはこの記憶領域を「緊張領域」⁷⁵と呼んでいるが、彼らによると混在するこれらの願望には方向性があり、その一つが、分割されたドイツの地方性を脱して世界と現実に対してより多くの領域を主張しようとする方向である。⁷⁶ そして、再生産された探検文学において「世俗世界性 (Welthaltigkeit)」⁷⁷が発現している、⁷⁸ などと指摘されるのは、そのような

⁷² G.C.スピヴァック『サバルタンは語るができるか』上村忠男訳 (みすず書房) 1999, 70頁。

⁷³ 同上。

⁷⁴ Bay/Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN, S.457ff. (注18)

⁷⁵ Ibid., S.459.

⁷⁶ Ibid. もう一つの方向性は、ドイツ国内の文化のハイブリッド化に向かう動きである。

⁷⁷ „Welthaltigkeit“はサイードの用語である„worldliness“を援用したものと言われるが、これには「世界内現実」や「世俗世界性」等の訳語が存在する。ここでは大橋洋一の選択に従い、「世俗世界性」を使用している。(ビル・アシュクロフト/パル・アルワリア『エドワード・サイード』大橋洋一訳 (青土社) 2005, 25f頁参照)

⁷⁸ Christof Hamann/Alexander Honold: Ins Fremde schreiben. Zur

主張の実現に関わる言及であると彼らは考えている。⁷⁹ しかし彼らにとっても理解が困難なのは、このような願望が植民地の歴史的な継続性を支持する訳ではなく、しかも物語の舞台となる地域自体はそれほど注目されていないにも拘わらず、なぜある雑誌のアフリカ特集に、「我々のアフリカ」⁸⁰といった疑似コロニアルな領有願望を露呈させるタイトルが使用されのか、という点である。この現象について植民地主義との批判的な取り組みは答えを出すことが出来ない、⁸¹ と二人は言うが、恐らく広大な版図を有したドイツ帝国という観念に対するノスタルジーが、植民地の記憶の活性化と共に喚起されたことは間違いないであろう。

しかし二人はさらに、コロニアルな探検や冒険に付随していた願望が、ポストコロニアル時代になって新たな文脈と背景を得て再生産されている、と指摘している。例えばエキゾティズム、セクシャリティ、事物の真生さ、体験の充実度、本国からの逃避等々の願望であるが、それらはポストコロニアル時代を経由したからには以前と全く同質ではない。しかし西洋の文化の中に深く根を下ろしているため、観光産業や消費主義、あるいは被支配地域の文化を美的対象と捉えるような新しい文脈を与えられた時、コロニアル時代のそれと殆ど変わらない形で再現される。⁸² だとすれば、〈他者〉の周辺化と不可視化がとりわけ顕著であったドイツ領ニューギニア地域に関し、声なきサバルタンの伝統が再生産されたとしても不思議ではない。しかし本来サイドの言う「世界世俗性」⁸³とは、旧来の自己イメージの再生や確認とは相反する状況に生まれるはずのものである。現代の再生旅行記における不在

Literarisierung von Entdeckungsreisen in deutschsprachigen Erzähltexten der Gegenwart. In: dies. (Hg.): *Ins Fremde schreiben*, S.9. (注3)

⁷⁹ Bay/Struck: *POSTKOLONIALES BEGEHREN*, S.463. (注18)

⁸⁰ „Unser Afrika“. In: *Literaturen* 6 (2002). Vgl: Bay/Struck: *POSTKOLONIALES BEGEHREN*, S.457. (注18)

⁸¹ Bay/Struck: *POSTKOLONIALES BEGEHREN*, S.463. (注18)

⁸² *Ibid.*, 575f. (注18)

⁸³ エドワード・W・サイド『世界・テキスト・批評家』山形和美訳（法政大学出版局）1995. 39ff頁.

の他者性については、本来「遠くに行くこと」は他者性とは関係のない技術的な問題であり、それは「前線」を開くことであって「配慮」することではないという指摘や、⁸⁴ 旅の「コンタクト・ゾーン」で起こることは「参与なき観察」であって本来文学のテーマとはならない、⁸⁵ といった言明もあるが、「参与なき観察」がコロニアルな行為と潜在的に結び付くことはM・L・プラットが「反-征服の描写」⁸⁶と呼んだ現象と同質であり、やはり彼女が名付けた「コンタクト・ゾーン」における「帝国の眼差し」⁸⁷も、バイとシュトゥルックが指摘するように、コロニアルな願望の再生産によってその本質を変えないまま「西洋の眼差し」として現存してしまうことになる。⁸⁸

とは言え、他方では同じニューギニア地域を描きながら他者性の構築を模索するポストコロニアル文学も同時に存在するのであり、⁸⁹ この旧植民地というトポスはまさに「緊張領域」の様相を呈していると言えよう。この記憶地帯に様々な生起する作品群がどのように、またなぜ「世俗世界性」を獲得しようとしているのかに関し、バイとシュトゥルックが言うようにまだ問いの方が多い状況であるからには、⁹⁰ 今後さらに批判的考察を重ねるしかないであろう。

【本稿はJSPS科研費15K02400の助成を受けたものである。】

⁸⁴ Honold: Das weiße Land, S.71. (注21)

⁸⁵ Alex Capus: Wieso Reisen kein literarisches Thema ist. In: Hamann/Honold: Ins Fremde schreiben, S.182. (注3)

⁸⁶ Pratt: Imperial Eyes, S.7. (注26)

⁸⁷ Ibid.

⁸⁸ Bay/Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN, S.578. (注18)

⁸⁹ 副島美由紀「新しい“オセアニズム”と旧ドイツ領南洋」(注27)

⁹⁰ Bay/Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN, S.459.

Postmoderne Wiederkehr der Abenteuerreise und Abwesenheit der Fremden

Miyuki SOEJIMA

Seit etwa den 90er Jahren hat in der deutschsprachigen Literatur postmodernes historisches Erzählen, das man nach angloamerikanischem Muster als „Historiografische Metafiktion“ bezeichnen kann, eine Konjunktur erfahren. Insbesondere hat die literarische Wiederkehr historischer Abenteuer- oder Entdeckungsreisen einen großen Erfolg. Aber die geographische Entdeckung ist ein kolonialistischer Akt und dabei entstehen oft die von M.L. Pratt so genannten „Kontakt-Zonen“. Es stellt sich also die Frage, wie diese Zonen für die Leser des 21. Jahrhunderts geschildert worden sind, und ob die reinszenierten kolonialen Abenteuerreisen einer postkolonialen Reflektion zugänglich sind. Um über diese Fragen Überlegungen anzustellen, befasst sich der vorliegende Beitrag mit vier Texten, die Abenteuer- oder Entdeckungsreisen in der ehemaligen deutschen Südsee bearbeiten. Dabei will ich mich auf die Frage konzentrieren: wie die Fremden in diesen Texten dargestellt worden sind.

Bei Alex Capus *Reisen im Licht der Sterne* handelt es sich um eine Hypothese, dass Robert Louis Stevenson auf einer Pazifikinsel den legendären Kirchenschatz von Lima gefunden habe. Der Roman mit der Thematik des 19. Jahrhunderts ist zwar spannend geschrieben, aber die Südseeinsulaner sind stark marginalisiert und mit dem stereotypischen Vokabular der Kolonialzeit beschrieben. Marc Buhls *Das Paradies des August Engelhardt* bearbeitet eine Tragikomödie über einen deutschen Lebensreformer und seinen Versuch, eine Vegetarierkolonie auf einer

Südseeinsel zu gründen. Die Handlung ist relativ geschichtstreu, aber die Inselbewohner sind nach den Mustern von Karl Mays Figuren dargestellt. Vor allem verkörpert der Häuptling „den edlen Wilden“ und steht dem Protagonisten gegenüber vergleichbar der Winnetow-Old Shatterhand-Beziehung. Auch bei Christian Krachts *Imperium*, wobei es sich auch um den Abenteurer August Engelhardts handelt, sind die Einheimischen in äußerst marginale und so karikierte Rollen gedrängt, dass sie wie Comicfiguren vorkommen. Bei Hans Christoph Buchs *Nolde und ich*, dessen Spielplatz auch das deutsche Neuguinea ist, ist es komplizierter. Es gibt drei Erzählstränge: Bei der Reise Emil Noldes steht sein Verlangen nach den Urmenschen im Mittelpunkt. Im Gegengewicht dazu treten die Einheimischen im Reisebericht vom Autor selbst kaum auf, und wenn dann in drittweltlichen Problemen. Die dritte Narrative bietet das metafikitive und pikaresktestes Bild von „Queen Emma“ an, das je geschrieben wurde. Alles in allem spielt der Autor, wie der Untertitel „Ein Südseetraum“ andeutet, bei dieser sozusagen Meta-Metafiktion ein bitteres Spiel mit europäischen Südseefantasien, die mit der Realität des Inselgebietes wenig zu tun haben.

Die Fremden bei der Reinszenierung der Abenteuerreisen sind also unsichtbar gemacht oder verzerrt worden. Eine postkoloniale Wende ist dabei schwer möglich und der Weg zum – von Derrida und Spivak appellierten – „Ruf nach dem »tout autre« (ganz anderen)“ ist noch lang. Das lässt sich dadurch erklären, dass das koloniale Begehren durch die Bearbeitung an kolonialen Topoi fortgeschrieben und transformiert wird. Wie H.Bay und W.Struck erklären ist das Erinnerungsgebiet der Kolonialgeschichte ein Spannungsfeld, wo nach-, neo-, und quasikoloniale Interessen und Imaginationen zusammen drängen. Deshalb wäre es nötig, über die Transformation der *imperial eyes* in *western eyes* weiter kritisch zu reflektieren.